

# 渡辺貞一 光と影のあわい



会期 | 2025年12月13日[土]～2026年3月23日[月]

会場 | コレクションラボ

主催 | 八戸市美術館

番号	作品名、資料名	作家・制作	制作年	技法・材質	サイズ(縦×横)
<b>1917-45 兄の死、自身の死の淵</b>					
1	自画像	渡辺貞一	1943年(昭和18)	キャンバス、油彩	53.0×40.9
<b>1946-49 帰国、入信</b>					
2	北国	渡辺貞一	1947年(昭和22)	キャンバス、油彩	65.1×90.9
3	冬の教会	渡辺貞一	1949年(昭和24)	キャンバス、油彩	65.0×53.0
<b>1950-62 再び上京、結婚</b>					
4	静物	名久井由蔵	1965年(昭和40)	板、油彩	31.0×39.5
5	博物誌	渡辺貞一	1958年(昭和33)	キャンバス、油彩	88.3×115.9
6	囚われた船	渡辺貞一	1962年(昭和37)	キャンバス、油彩	70.0×112.0
7	貧しき漁夫	渡辺貞一	1962年(昭和37)	キャンバス、油彩	96.0×130.3
<b>1963-78 光と影、技法「釘描」の追求</b>					
8	イタコ賛歌II	渡辺貞一	1963年(昭和38)	キャンバス、油彩	30.5×36.5
9	宇曾利の記	渡辺貞一	1964年(昭和39)	キャンバス、油彩	94.0×133.0
10	極光 II	渡辺貞一	1969年(昭和44)	キャンバス、油彩	140.0×140.0
11	ユーカラ	渡辺貞一	1966年(昭和41)	キャンバス、油彩	107.8×246.8
12	カムイの庭	渡辺貞一	1972年(昭和47)	キャンバス、油彩	151.0×160.0
13	川原の風景	渡辺貞一	1973年(昭和48)	キャンバス、油彩	130.0×162.0
<b>1979-81 中国旅行、水墨画</b>					
14	野仏	渡辺貞一	1979年(昭和54)	キャンバス、油彩	45.5×38.0
15	夕やけの詩	渡辺貞一	1979年(昭和54)	キャンバス、油彩	33.4×24.2
16	鳥	渡辺貞一	1979年(昭和54)	紙、墨画	45.1×29.8 *
17	寺	渡辺貞一	1980年(昭和55)	紙、墨画	44.8×27.8 *
18	津軽雪景 A	渡辺貞一	1980年(昭和55)	紙、墨画	51.8×49.5 *
19	竹林	渡辺貞一	1980年(昭和55)	紙、墨画	47.2×30.0 **
20	中国風景	渡辺貞一	1980年(昭和55)	紙、墨画	40.0×33.0 **
21	津軽雪景 B	渡辺貞一	1980年(昭和55)	紙、墨画	53.1×43.3 **
<b>映像資料</b>					
関係者インタビュー	[出演] 加福紀子 久木田恭輔 山下明 渡邊修 渡辺裕 [撮影・編集] 八戸市美術館	2025年			計30分40秒

\*前期 (12/13～2/2) のみ展示作品 \*\*後期 (2/4～3/23) のみ展示作品

## 関係者インタビュー

### 1. 山下明(北海道苫小牧市、第一洋食店3代目店主)

撮影日 | 2025年10月6日

時間 | 5分31秒

撮影協力 | 苫小牧市美術博物館

※はちとまネットワーク連携事業として撮影

渡辺は、昭和30年代から、北海道苫小牧市で幾度も個展を開催しました。苫小牧市に滞在中、足繁く第一洋食店に足を運び、2代目店主である山下の父・正と親しくしていました。正は渡辺作品を毎年のように購入し、店内には十数点ほどの作品があります。店内には、他の作家の作品もあり、時折入れ替えながら渡辺の作品が飾られています。山下は、函館市出身の画家・国松登に連れられてきたのがきっかけで第一洋食店に渡辺が通い始めたことや、旅館で酒が足りなくなると厨房にある料理酒を飲むほどの酒好きだったこと、渡辺からの書簡の中で、当時まだ子どもだった山下を気にかけていたことなどを語りました。

### 2. 久木田恭輔(画家)

撮影日 | 2025年10月30日

時間 | 5分53秒

久木田が渡辺と初めて会ったのは、高校2年生の頃です。当時、国展で入選した自分の様子を見に来たのではないかと語っています。また、酒を飲んで金銭を使い果たした渡辺が、久木田の家に来て布団に入り込み、絵の話をしてくれたことがあったそうです。酒好きで面白い人だったこと、風呂敷に作品を包んで絵を売り歩いたことや、外泊した時でさえ、折りたたみナイフで絵具を引っ搔いて絵を描いていたこと、渡辺の作品の根底にあるものは恐山であると思うことなど、画家としての渡辺の生活や姿勢について振り返りました。

### 3. 加福紀子(渡辺貞一の姪)

撮影日 | 2025年11月17日

時間 | 6分25秒

加福は、生まれた当時、青森市で渡辺貞一を含む家族8人と暮らしていました。遊んでいる様子を、渡辺が瞬時にデッサンしていた記憶があるそうです。結婚する際に渡辺から贈られた作品や、晩年までやり取りした年賀状などの資料を丁寧に保管しており、それらはその後の調査に役立てられました。加福が生まれたときには、八戸の画家である名久井由蔵から大きな日本人形が贈られたことも語っています。渡辺が亡くなる約1ヶ月前に見舞いに行ったとき、帰り際に「叔父さん、元気だね」と声をかけたところ、「いや、サヨナラだな!」という一言をかけられ、渡辺が自らの死を受け入れていたことを感じたと言っています。

### 4. 渡辺修(渡辺貞一の甥)

撮影日 | 2025年11月21日

時間 | 7分03秒

渡辺は、妻・美喜子から月8升までと決められるほど酒好きでした。甥の修の結婚式で酒を飲み、その場を盛り上げてくれたこともあったと言っています。それでも、絵を描くときは絶対に酒を飲まなかったことや、画業に反対していた祖母・まさに絵の具を隠されても描くことを諦めなかったことから、渡辺が絵を描くことに真摯に向き合っていたことがうかがえます。修の家族と渡辺が共に青森市に滞在しているときには、兄貴分の棟方志功が訪ねてきたことも記憶に残っているそうです。また、修の家族が下北の大畑町(現在のむつ市)に移り住んだ際、渡辺が3～4ヶ月に1回は訪ねて来て、大畑町にほど近い恐山に、画材を携えて通っていたとのことでした。

### 5. 渡辺裕(渡辺貞一の甥)

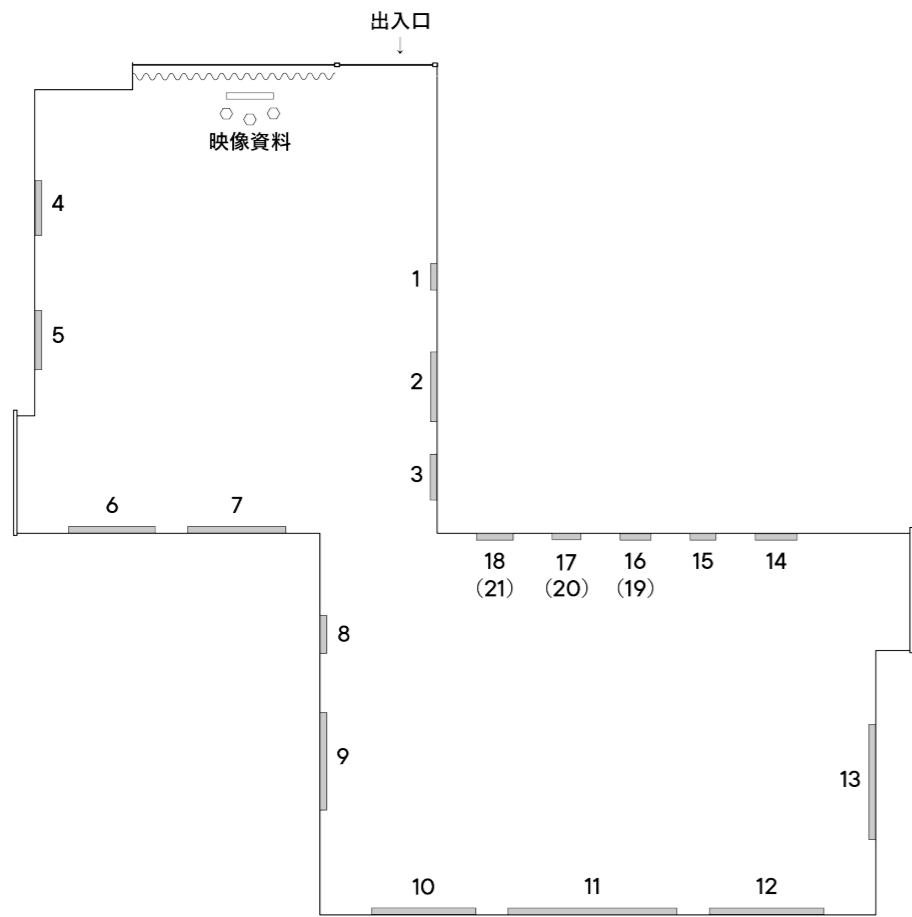
撮影日 | 2025年11月17日

時間 | 5分48秒

※作家と同姓のため、氏名を含んで表記

渡辺裕は、2017年に七戸町立鷹山宇一記念美術館で開催された展覧会「北辰の宙 渡辺貞一誕生百年記念展-中井昌美コレクション-」にあたり、渡辺について調査したひとりです。その際は、姉の加福が保管していた資料調査や、渡辺をよく知る人物への聞き取りなどが行われました。本展では新たな情報として、青森市にある照法寺の彫刻欄間の制作に、渡辺も参加していたことが語られています。そのほか、渡辺が祖母・まさを描いた肖像画や、渡辺が飲みの席で「俺は東京で戦ってるんだ」と激し、物静かな普段とは違う一面に触れたことも語っています。

## 〈会場MAP〉



No.16、17、18 前期(12/13～2/2)展示

No.19、20、21 後期(2/4～3/23)展示

## 〈作品解説〉

### 1. 渡辺貞一《自画像》1943年(昭和18)キャンバス、油彩

戦時下に描かれた本作は、渡辺が結核を患い倒れた時に、最期を覚悟した力を振り絞って生み出されました。自筆文では、「俺もこれでおしまいな!と、ふっと思い、死ぬ前に自画像を描いて残しておこうと、よろよろと立ち上がって、血の気のない自分の顔を見つめながら、むさぼるように描いた」と綴られています。また、「それをアトリエにかけておくと不思議におちついて仕事が出来ると」語っており、渡辺が画家としての道を歩むうえで、この一枚が大切な拠り所であったことがうかがえます。

### 2. 渡辺貞一《北国》1947年(昭和22)キャンバス、油彩

全体的に暗い画面に、雪が積もった川辺が描かれ、どこか物寂しい印象です。渡辺は、ほかにも冬の河の風景を描いた《凍る河》(1979年)という作品も残しています。晩年には「私は、冬が来ると、遠い北国の凍る河のことを思う。」(『県政のあゆみ』1981年2月号、青森県広報課)という言葉を残しています。人生のほとんどの期間を東京で暮らした渡辺は、凍った河を描くことで郷愁の念を癒していたかもしれません。

### 6. 渡辺貞一《囚われた船》1962年(昭和37)キャンバス、油彩

渡辺には、仕事に身が入らない時期があったそうで、妻の美喜子にはいつも気苦労をかけていた、という手記があります。そのような日々が続く中、本作が『朝日ジャーナル』(1962年、10月21日号、朝日新聞社)の表紙に掲載されました。このことを思いがけず本人以上に喜んだのは、妻の美喜子だったといえます。渡辺夫妻の日常に光を差した本作は、No.7の《貧しき漁夫》と同様に、ピエール・リュヴィス・ド・シャヴァンヌの《貧しき漁夫》(1881年、オルセー美術館蔵、当時ルーブル美術館蔵)からインスピレーションを得た作品といわれています。

### 7. 渡辺貞一《貧しき漁夫》1962(昭和37)キャンバス、油彩

渡辺は、リュヴィス・ド・シャヴァンヌによる同名の作品が好きで、作品図版をアトリエに貼っていました。シャヴァンヌの作品は1881年のもので、渡辺はそれに倣ったと思われます。本作では、静寂の中で頭を垂れる漁夫が描かれていますが、シャヴァンヌの作品は背景に妻と、1人だけ明るい色の布に包まれた子どもが描かれており、未来への希望とともに、貧困による苦しみを象徴しているといわれています。

渡辺は翌々年の1964年の欧州の旅で、シャヴァンヌの実物を観ることができました。しかし、イメージとは異なっていたようで、「大きくて、甘くて意外につまらなかった」「実物に一度はふれてみるものだ」という感想を残しています。(東奥日報での談話、1965年)また、渡辺は、先人たちの作品を参考にして得たものを「借着」と表現しました。「最早ルッソーもブリューゲルも喜びと救いにはならない。わたしは、わたしの世界の中で、東西の有名無名の先達から多くのものを借着したが、所詮、わたしはわたしだということ。ヨーロッパをひとり歩いてみていっそうこの考えはたしかめられた。これから一枚一枚借着を返していきたいとおもっている」(第40回国展目録ふろく『談話室』、1966年、国展会)と綴っています。

### 8. 渡辺貞一《イタコ賛歌II》1963年(昭和38)キャンバス、油彩

### 9. 渡辺貞一《宇曽利の記》1964年(昭和39)キャンバス、油彩

渡辺は、イタコ信仰の作品を数多く描きました。No.8は、恐山を連想させる荒涼とした背景が描かれていながら、イタコを賛美したタイトルとなっています。虚ろな眼差しをしたイタコから、恐山に幾度も通った渡辺の、畏敬の念が感じられます。「宇曽利」とは、入江を示す東北の地名です。恐山は昔、「宇曽利山」と呼ばれており、また、カルデラ湖である「宇曽利山湖」があります。No.9の中央には、地藏か水子を思わせるような、小さな人影が描かれています。暗い印象の本作ではありますが、画面上部に描かれた暖色が、明るい印象をささやかに添えています。

### 11. 渡辺貞一《ユーカラ》1966年(昭和41)キャンバス、油彩

### 12. 渡辺貞一《カムイの庭》1972年(昭和47)キャンバス、油彩

「ユーカラ」とは、アイヌ民族の中で口頭で伝承されてきた叙事詩のことです。ユーカラは英雄叙事詩の「人間のユーカラ」と、神話の「カムイユーカラ」に分けられ、No.12とNo.13はカムイユーカラが描かれています。また、「カムイ」は、「神」や「仏」と似た意味でもあり、自然や、自然の恵みを与えてくれる動物や植物、天候などの人間の力が及ばないものを敬った敬称でもあります。アイヌの人々にとって、多くの鳥はカムイのひとつとされており、No.11では、中央に鳥に祈りを捧げる様子が描かれています。アイヌ語に、「神々の遊ぶ庭」を意味する「カムイミントラ」という言葉があります。ここでいう庭は、北海道の中央部にある大雪山(大雪山国立公園)のことで、その美しさに崇敬と畏敬の念を抱いていました。No.12は、月夜を背景に、祈るように手を組む人影と、その後ろに祭壇のようなストーンサークルが描かれています。月もまたカムイのひとつであり、月に照らされた庭のカムイと共に、自然への信仰心を描いたようにも感じられます。

渡辺は、キリスト教、仏教、アイヌの信仰と、様々な宗教を題材としています。何を信じるかではなく、それぞれの信心や、その先にある救いを見つめていたのかもしれない。

### 13. 渡辺貞一《川原の風景》1973年(昭和48)キャンバス、油彩

本作は、高度経済成長と共に自然破壊が進み、公害が問題となった時代に描かれました。妻の美喜子は本作について、「公害や自然破壊が密かに進む時代。(中略)霧りのある青い空の下、表情をなくした少女と、黒く濁んだ水と、黄ばんだ水門、何かを告げる白い鳥、瓦礫化した川原の石ころをひとつひとつ丹念に描き、コントラストの美しい画面に仕上げられた」と記しています。(『渡辺貞一作品図録』、1990年、八戸市美術館)また、本作はいつも以上に時間をかけて制作されたと美喜子は残しており、渡辺にとって熱のこもった作品であることが伺えます。表情のない少女に、渡辺はどのような心情を込めたのでしょうか。

### 14. 渡辺貞一《野仏》1979年(昭和54)キャンバス、油彩

### 15. 渡辺貞一《夕やけの詩》1979年(昭和54)キャンバス、油彩

No.15は、朗らかな表情の野仏の隣に、野に咲く花が添えられています。渡辺は様々な宗教を題材にしましたが、晩年は、東洋の宗教を中心に描きました。また、「花のうつくしさに、いつきの精気を感じることもある」(『県政のあゆみ 8月号』1980年、青森県広報課)、「花であれまた器物であれ、そのものに新しい生命(世界)をあたえる、したがって生きた静物を描こうと思っている」(『県政のあゆみ』、1980年9月号、青森県広報課)と記しており、生の“光”の部分へ目を向けていたこともわかります。

No.16については、「夕景の女(中略)私のもっとも好きな詩的なモチーフのひとつである」(『県政のあゆみ 8月号』1980年、青森県広報課)という言葉からうかがえるように、渡辺が思い描く温かさや懐かしさが感じられます。